長野市立博物館

博物館だより

第68号

2007.3.31

Nagano City Museum

体感！川中島の戦い2007

特別企画展
開催!!

2007年3月24日、午前11時から特別企画展『体感！川中島の戦い　2007』のオープニングイベントがありました。今回のＮＨＫ大河ドラマ「風林火山」のチーフプロデューサー若泉久朗さん、山本勘助役の内野聖陽さん、由布姫役の柴本幸さんをお迎えし、約2,000人の方々と企画展オープンを祝いました。

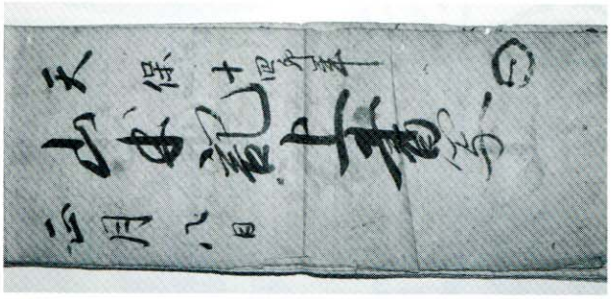
今回の大河ドラマの原作は井上靖の『風林火山』。井上靖の生誕100年を記念したもので、意外にも大河ドラマで井上作品が取り上げられるのは今回が初めてだそうです。

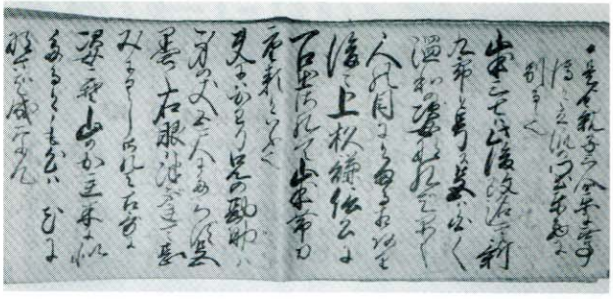
川中島の戦いをテーマにした大河ドラマは今回の風林火山で3作目です。第1回は昭和44年（1969）に放映された海音寺潮五郎の『天と地と』を原作にしたもので、主役の上杉謙信を石坂浩二、武田信玄を高橋幸治が演じました。2作目は昭和63年（1988）に新田次郎の『武田信玄』を原作に、武田信玄を中井貴一、上杉謙信を柴田恭平が演じました。覚えていますか？

長野市では、これに合わせて「風林火山・プロジェクトながの実行委員会」を立ち上げ、ＮＨＫと協力して体感型の展示を開催しています。会期は3月24日から12月16日。7月9日から13日を除いて無休で実施する、博物館としてははじめてのロングラン展示です。ご期待ください。

（降幡浩樹）

山本勘助あらわる！　初公開『山本記上書写』





▲『山本記上書写』表紙　関川喜八郎蔵

長野市の関川喜八郎氏のお宅から、山本勘助の伝説を記した『山本記上書』という写本が見つかりました。山本勘助の由緒、諸国への修行、武田家への仕官を中心に、ある原本から関川氏の祖先が天保14年（1843）正月に写したものです。江戸時代後期には、勘助の伝説が庶民の間でも書写され、広まっていたことがわかります。

今回のドラマの主役は山本勘助です。『甲陽軍鑑』では山本勘助は「三河牛窪（愛知県豊川市牛久保町の者」とあり、その生年は明応2年（1493）と同9年の二つの説が書かれていてはっきりしません。『甲陽軍鑑』では山本勘助を足軽大将と描いています。

今回、見つかった『山本記上書』では『甲陽軍鑑末書』を引用し、26歳から諸国を遊歴したと記した後、勘助は明応9年（1500）庚申2月の生まれで、永禄4年（1561）の川中島の戦いで62歳（本文では63歳）で亡くなったとあります。本書では勘助の風貌を身長が5尺に足らず（約151㎝）、色黒で、右目がつぶれていると書かれています。右目が見えなくなった理由は、幼いときに薪を取りに山に出かけ、猪と遭遇し格闘して右目を突き潰されたとあります。

では、勘助戦死の地である長野では勘助をどのように見ていたのでしょうか。松代町柴、千曲川の右岸にある山本勘助の墓石の周りには、元文4年（1739）に松代藩士・鎌原重賢による碑文が彫られています。そこには勘助が三州牛久保の生まれで、武田家に仕官した年を44歳と刻んでいます（逆算すると生まれは明応9年となります）。兵の用い方が自在で、特に戸石合戦で摩利支天のような働きをし、天下にその名を知られるようになった、とあります。これは『甲陽軍鑑』の記述と重なり、鎌原が『甲陽軍鑑』の記述を参考にしたことがわかります。

一方、上杉方の軍記とされる『川中島五箇度合戦記』では、第3次川中島の戦いに山本勘介が戦死したとあります。この本は、慶長20年（1615）3月に清野助次郎と井上隼人正が記し、寛文9年（1669）に『日本通鑑』編纂のために上杉家から老中・酒井雅楽頭忠清に献上された、と跋文に記されています。上杉方のいう第3次川中島の戦いとは、通説の第4次川中島の戦いと重なります。本文では「足軽大将には山本勘介・初鹿源五郎討死する」とあります。和歌山県立博物館所蔵の『川中島合戦図屏風』紀州本に、この時の勘助討死の場面が下のように描かれています。

上杉方の記録では勘助の名前のみが記され、本人に関する細かい記述はありません。

川中島の戦い同様、山本勘助についても今後の資料の掘り起こしと、研究の深化が必要です。

（降幡浩樹）

第８回長野市埋蔵文化財発掘調査速報展 発掘された長野 2007

はじめに

四方を山に囲まれ千曲川による肥沃な大地に恵まれた善光寺平では、古くから人々の営みが続けられてきました。古代の集落や墓域、耕作地など先人たちの多様な暮らしぶりは、遺跡として現在なお地中に眠っています。

長野市埋蔵文化財センターでは、開発行為などによって壊される遺跡の記録保存を目的として発掘調査を実施しています。調査では、住居跡や古墳、石器や土器など往時の生活を示す資料が多数確認されています。

この度開催する「発掘された長野 2007」は、近年発掘された遺跡の最新情報を皆様に公開するものです。新聞やテレビで報道され話題になった「善光寺門前町跡」、「吉田古屋敷遺跡」などの遺跡を含む６遺跡の発掘調査速報を出土遺物や写真パネルを中心に展示いたします。ここでは、その中の２遺跡について紹介します。

▲善光寺門前町跡の現地説明会

垣間見える門前町の様子（善光寺門前町跡）

善光寺表参道に面する大門町にて、店舗建設にともなう発掘調査を実施しました。調査では古墳時代の竪穴住居跡や中世の溝跡、江戸時代の半地下式倉庫跡など様々な遺構が確認されました。検出された遺構からは、善光寺建立以前からこの地が集落域であったことや、中近世に門前町として繁栄していった様子がうかがえます。

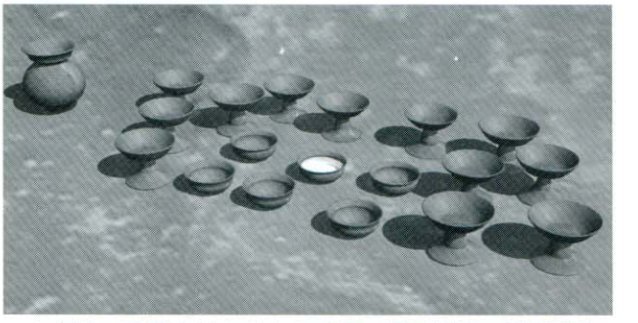
近世の土坑からは「元禄一分判金」が出土しました。一分は江戸時代の貨幣単位であり、四分で一両（小判一枚）に相当します。当時でも貴重品で、発掘調査で発見されることは珍しいものです。

▲出土した元禄一分判金

篠ノ井の古代集落（篠ノ井遺跡群）

篠ノ井遺跡群は、千曲川左岸の自然堤防上に残る弥生時代から平安時代の集落跡です。これまでに密集した竪穴住居跡や集落に対応する古墳が発見されています。

古墳時代中期（5 世紀）の古墳群は、いずれも盛土はすでに削り取られた円墳ですが、古墳の周りを巡る溝からは多量の土器が出土しています。ここで、お葬式またはお墓参りのような儀礼行為を行っていたと思われます。



▲古墳の周溝より出土した土器の配列状況（復元図）

速報展では、今回ご紹介した遺跡はもちろん、近年発掘した他の遺跡についても、分かりやすく展示公開しています。普段見慣れた風景の下に残る長野市の古代遺跡を是非ご覧ください。

（埋蔵文化財センター　宿野隆史）

会　場／長野市立博物館ロビー
期　間／平成 19 年 3 月 23 日（金）
　　～4 月 22 日（日）
主　催／長野市教育委員会文化財課
　　埋蔵文化財センター

善光寺門前商家の看板を展示します!!

はじめに

最近の再開発によって姿を変えている善光寺表参道ですが、まだまだ昔ながらの店構えの老舗のお店も健在です。このような老舗のお店の持つ魅力の一つに看板があります。今も昔も看板は店の顔、いかに道行く人の目を惹くことができるか、そのためにさまざまな趣向が凝らされました。例えば江戸時代のお店の看板には、ろうそく屋なら大きなろうそくの形をした看板、両替商ならお金をかたどった看板など、自分の売る商品を看板にしたものが見られました。

▲喜多の園の看板。「御茶処」の上に龍、左右に高砂、下に七福神の彫刻が配されている

お茶屋さんの看板

善光寺表参道にもひときわ目を惹く看板がありました。それは大門町にある嘉永6年（1853）創業の喜多の園というお茶屋さんの看板です。「御茶処」と記された看板のまわりには龍や七福神、高砂の彫刻が配され、上には雨によって看板が傷まないように屋根をかけるといった豪華なもので、明治30年（1897）発行の『善光寺独案内』という当時のガイドマップに絵入りで掲載されるなど、当時の町の評判になっていたものです。これは妻科に住んでいた宮大工山崎儀作によって3年もの歳月をかけて作られたと伝えられています。

博物館に来るまで

しかし昨年の3月に店が元善町に移転することとなったため、この看板を博物館で預かることになりました。とはいえ高さ2メートル幅2メートルほどの大きな看板ですので、その取り外し作業はクレーンにより通行人に危害のないように夜遅くにはじめられ、翌朝近くまでかかる大作業だったようです。そうして博物館に届けられた看板は、雨よけの小屋根があったため彫刻の傷みは少なかったのですが、善光寺に集う鳩の約150年分のフンがこびりつき、真っ白になっていました。そこで博物館では看板に取り付けられている彫刻を取り外してそれぞれの部分をクリーニングすることにしました。今回このクリーニングが終了したのを機に、5月頃より看板の彫刻を博物館のエントランスロビーで展示する予定でいます。躍動感あふれる龍の彫刻や、七福神の彫刻、特に七福神は、いかつい顔の毘沙門天がお茶をたてていたり、弁財天が石臼でお茶を挽くなど、お茶屋さんに関連づけられたユーモラスなものです。

宮大工山崎儀作

彫刻を手がけた山崎儀作は天保2年（1831）生まれで、江戸時代後半からおこった社寺建築彫刻の一派である立川流の流れを汲む宮大工でした。その作品は西後町の屋台や、新諏訪町諏訪神社の大々神楽、長沼神社の屋台など市内周辺に残されており、いずれも彫刻の技が冴える優れた作品です。立川流宮大工山崎儀作の技をぜひこの機会に間近でご覧になってください。　**（細井雄次郎）**

▶お茶をたてる毘沙門天（七福神の彫刻部分）

「昔の道具展～冬の暮らし～」を開催しました

はじめに

下の写真を見てください。これは何でしょうか？年配の方ならすぐお分かりになるかもしれませんが、見学に来る小学生たちにとっては見たこともない道具。みんな頭をひねりながら「名刺！」「メモ帳！」「お盆の時に焚く木！」など、いろいろな答えをあげていきます。そこで実物に触れさせてみると、縦に割れやすいことや一方の端になにやら黄色いものが塗ってあることに気づきます。最後にこちらから黄色いものが硫黄であることを教えると、「昔のマッチだ！」の声があがります。

このようなやり取りが小学校の見学のたびに博物館の常設展示室内で繰り広げられました。

▲つけ木

昔の道具展

博物館では、1月23日～3月25日まで常設展示室2階の民俗コーナーで「昔の道具展～冬の暮らし～」を開催しました。これは博物館が所蔵している1万点ほどの民俗資料の中から、長野の厳しい冬を過ごすための生活道具をいくつか選んで展示したもので、カイマキや陶製湯たんぽ、下駄スケート、アンカ、こたつやぐらなど、昭和30年代以前に使われていたものを中心におよそ30点ほどが並びました。

ちょうどこの時期、小学校の4学年では昔の生活道具についての授業が行われていることもあり、期間中、市内小学校のうち13校の子どもたちが来館しました。小学校の見学では、展示室内にある江戸時代の復元民家の囲炉裏をかこんで昔の暮らしについて簡単に説明したあと、道具の展示コーナーへ移動し、ときおり道具のクイズなどを出題しながら、それぞれの道具をじっくりと見学してもらいます。展示品の中にはカイマキや掘りごたつ、はんてんなど実際に使ってもらえる道具を置いたり、昔の双六やメンコを複製して、手にとって遊べるようにしたため、子どもたちには大変好評でした。

道具の情報を求めて

博物館には約1万点ほどの民俗資料が収蔵されていますが、現在のところそれらのほとんどが展示や利用がされることなく収蔵庫内で眠っています。今回の展示は、このようななかなか日の目を見ない資料の利活用という意味合いもありました。ただし長年収蔵庫内で眠っていた資料のため、資料に付随する情報が不足していました。特に実際に道具を使ってみての話は、資料を活き活きとさせる重要な情報です。

そこで、実際に道具を使っていた年代の方に話を伺おうということで、昔の道具を持って松代の老人ホームを訪問しました。集まったご年配の方々の前に下駄スケートや、竹スキー、背負子などの道具を置くとみんな一様に懐かしそうな顔をされ、いろいろな話をしてくれます。ワラグツを前にした老婦人は、小学校の頃に行ったウサギ追いの思い出を話され、下駄スケートでは真田紐を使って、実際の履き方指導をされたり、竹スキーを前にしては、割り竹のほか雪すべりには米俵の両側につけるタワランパセを使ったなどなど、面白い話が次々に飛び出し、その一部は今回の展示の中に活かすことができました。

今回の展示は収蔵資料の利活用、学校との連携、資料情報の発掘という3つの面で有効なものでした。できれば来年もこの時期にテーマを変えて展示を行いたいと考えています。　**（細井雄次郎）**

博物館職員紹介　私とシナイモツゴとモツゴの関係

私は昨年の8月より茶臼山自然史館の専門員として赴任してきました古賀和人といいます。専門はシナイモツゴという池沼、ため池に生息しているコイ科の小型魚です。この魚は茶褐色～黒褐色の体に鈍い金属光沢をもち、大きさは5cm程度で小さなコイを前後から少し圧縮したような寸胴な体形です。地味で目立たないためか、あまり研究されなかった淡水魚です。シナイモツゴの自然分布は関東・新潟以西から秋田・岩手以南と広く、長野県にも生息しています。しかし、近年の開発に伴う生息地の悪化・縮小、魚食性外来魚のオオクチバスの侵入による捕食、近縁種モツゴの侵入などの影響により生息地が減少していきました。そのため環境省は絶滅の恐れのある野生生物としてシナイモツゴを絶滅危惧種IBに指定し、保護を呼びかけています。

シナイモツゴとの出会い

私とシナイモツゴとの出会いは弘前大学4年生のときでした。卒業研究のテーマの中にあった青森県ではじめて見つかったシナイモツゴの基礎研究がそれでした。それまで青森県ではシナイモツゴは見つかっておらず、また野外での基礎調査もほとんど行われていませんでした。その後、シナイモツゴの減少要因の一つであるモツゴとの関係に興味もち、北海道大学へ進学しました。

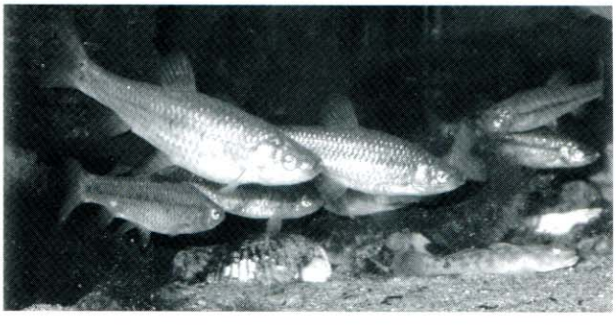
モツゴとシナイモツゴの不思議な関係

2種の関係性は交雑が深く関わっていると言われていました。実際多くの地点で2種が認められる生息地があり、そこでは雑種が認められています。長野県ではシナイモツゴの生息地へモツゴが侵入するとシナイモツゴはモツゴに数年で置き換わります。そこではシナイモツゴ♀とモツゴ♂の組み合わせでしか雑種は認められないため、置き換わりの原因は偏った交雑であることがわかっています（奨励研究員小西さんの研究より）。しかし、北海道では2種が長く共存している湖があります。置き換わりや共存という結果は何が原因なのでしょうか？それは実はまだ解明されていません。が、一部わかっていることを紹介します。現在のシナイモツゴの生息地は、関東を除く自然分布域と移入したと思われる青森県および北海道に散在しています。一方のモツゴは自然分布域の東日本からコイなどの養殖用種苗等に混入し、分布域を拡大。今では日本全国に生息しています。ともにその分布域は南北に長い分布を示していますが、2種で繁殖期の開始時期や長さが異なっています。シナイモツゴは長野県から北海道までほとんど繁殖期（4月～7月）は変わりません。一方、モツゴは長野県では4月～7月、北海道では5月～7月と繁殖開始時期や繁殖期間が短くなります。そのため北海道ではシナイモツゴを維持する単独繁殖期間がありますが、長野県ではかなり制限されます。

ただし、北海道の共存している湖の隣には同じように2種が侵入した湖がありますが、すでにモツゴに置き換わっていますので、繁殖期だけで2種の関係性が決まるわけではありません。2種の間では生物学的な相違もあります。モツゴの方が大きく、一繁殖期間中の産卵数もモツゴのほうが多いのです。つまり、交雑をしなくても数の論理でモツゴはシナイモツゴに勝てるのです。それでも北海道には2種が共存できる湖がある。不思議でしょう？実は北海道の生息地では交雑にも違いがあります。長野県のように組み合わせの偏った交雑ではなく、双方向で交雑が起こっています。この辺も長野県とは違い共存を可能にしている要因の一つと考えています。2種の関係性の全てを解明するにはまだまだ時間がかかりますが、皆さんも興味をそそられませんか？

最後になりますが、自然史館でもモツゴとシナイモツゴを飼育しています。また自然史館は戸隠地質化石館との合併に伴い今年の11月25日に閉館します。茶臼山自然史館としての活動は今年が最後の年になりますので、是非いらしてください。

（古賀和人）



講座参加者による活動成果発表会

3月3日（土）に博物館会議室にて、博物館の講座参加者による活動成果発表会を開催しました。

昨年度に引き続き第2回目の開催でしたが、多くの皆様にご参加いただき盛況でした。

当日は、博物館で開催している7講座のうち、見学や調査を主体とする4講座による発表が行われました。

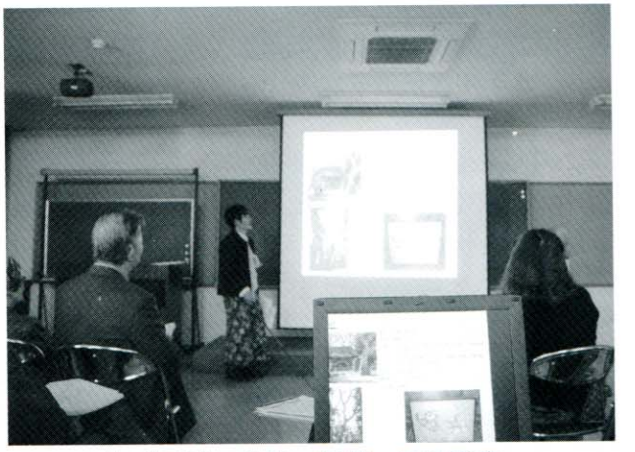
各講座の発表

総合講座「千曲川をあるく」は2002年10月から始まり現在まで継続している講座ですが、千曲川と関わる人々の生活を、実際に現地を探訪することによって実感し、人々の知恵や工夫、さらには自然環境を見直すことを目指しています。発表では、本年度に訪れた中野地域、飯山地域、木島地域の3地域についての調査成果が報告されました。

「鎮守の森を歩こう」は鎮守の森の景観が暮らしとの関わりの中でどのような変遷をとげてきたかを、現地調査を通じて調べていくことを目指します。本年は明治14年（1881）に実施された神社の境内樹木調べの記録を参考に、現在の樹木との変化、そしてその背景について調査を行っています。発表は、市内の鎮守の森をその立地条件から山手、平地、川辺に分け、それぞれを代表する神社の調査報告がなされました。

▲「千曲川をあるく」の発表

「石仏探検隊」は大岡地域にある石仏を対象に見学会や、石仏の所在調査を実施し、データーの集積を進めています。今回は地域内各地区の石造物の所在状況の報告とともに、これまで確認された石造物の集計データーが報告され、60年に一度の庚申の年にはやり庚申塔の建立が顕著となること、また石造物の建立は圧倒的に江戸時代後期に集中することなどの興味深い成果が報告されました。



▲プロジェクターを使っての発表
（「鎮守の森を歩く」）

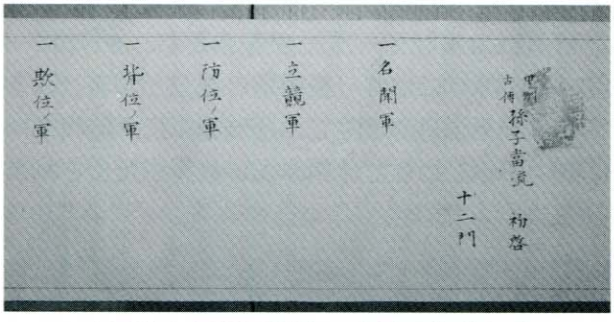
川中島の戦いは、著名な合戦の割には良好な同時代史料が存在しないため、その実態がよくわかりません。「川中島合戦を考える」はこの戦いが地元にとってどのような意味合いがあったのか、関連する史跡や伝承地を訪ねながら、改めて問い直すことを目指しています。発表会は講座参加者全員が一人ずつ自らの印象に残った見学地に関して報告を行っていただきましたが、従来の考え方にとらわれない柔軟な視点が随所にうかがわれ、興味深いものとなりました。

各講座は、地域に密接に関係した内容を素材としており、地域を見直し、地域の将来にも目を向けていくための、良い契機にもなることと思われます。

最後に

発表は、事前に各講座の参加者により、発表掲示用の資料や、資料集が作成され、貴重な記録として残されます。まだまだ、参加者は講座参加者が大部分で一般市民の方はごく少数でしたが、こうした活動を通して、博物館の活動を知っていただき、より多くの方に博物館を利用していただけるようになればと考えております。　**（千野　浩）**

新収蔵資料紹介 ―甲州流、上杉流の兵法巻物―



▲甲州古伝孫子當流　安政５年（1858）

▲上杉流兵法秘伝巻（獅噴之巻）慶応元年（1865）

上の写真は甲州古伝孫子當流と、上杉流兵法秘伝（獅噴之巻）を修め、師匠からめでたく免許皆伝を授かった認可状です。皆伝となった人物は山本伝之進。残念ながら山本が何藩の藩士かは不明です。

戦乱の時代が終り、江戸時代に入ると、戦は過去のものとなり、実践ではなく学問、知識として教えられようになりました。『甲陽軍鑑』はそのテキストとして広く読まれ、そこからこのような兵学に関する相伝の体制が整えられ、学問として活き続けていました。武田信玄が中国の『孫子』から「風林火山」の言葉をとって旗標（はたじるし）に使っていたことはよく知られています。信玄には禅僧・快川などのブレーンがついていました。また、甲州法度や信繁遺訓などにも中国の書物からの引用が多く、信玄、信繁の中国思想に対する教養はかなり高いものがあったことが注目されています。こうした兵法に関する知識も、中国の書物から取られ、参考にされていました。平和な江戸時代にあっては、武田方（甲州流）、上杉方（上杉流）の双方の軍学を学ぶことは決してはばかれるものではなかったのですね。　**（降幡浩樹）**

寄贈・寄託資料の紹介

平成 18 年度も多くの資料の寄贈・寄託をいただきました。厚くお礼申し上げます。

（敬称略・順不同）

寄贈資料

馬の鞍ほか	清水清成（信州新町）
木樋	久保田文登（大岡）
掛け軸	大日方昌直（小森）
唐箕	中村孝男（稲葉）
武田信玄公方図	松坂親雄（川合新田）
醤油絞り器など	大島茂光（西寺尾）
俵編み機など	宮入清一郎（布施高田）
更北村名誉村民章	更北支所
電話機など	共和小学校
背中あて	金丸竹一（鬼無里）
陶製湯たんぽなど	飯島長子（布施高田）
庚申講道具	小川　清（豊栄）
古文書	西沢幾男（川中島町）

寄託資料

旧東福寺村文書	篠ノ井公民館東福寺分館
茶碗など	町田文昭（村山）
看板	小笠原伸子（元善町）
歌詞原稿（更科ぶし）	篠ノ井商工会議所
北堀区有文書	北堀区

移管資料

火打ち金など	鬼無里ふるさと資料館